

臨床社会学としてのブルデュー社会学理論の展開 ——福祉社会における社会学の可能性と必要性——

三浦 直子

一般科

Toward a Clinical Sociology Based on Bourdieu's Sociological Theory The Possibility and Necessity of Sociology in Well-being Society

Naoko MIURA

Abstract

In the near future, Japan would become the society of mass longevity. That requires us to reflect the meaning and value of sociology, and to see what it can be and what it should do for Japanese society. Today, thus, the "clinical sociology" gets much attention from both sociologist and people in society. In this paper, to redefine a clinical sociology, to re-consider the possibility and necessity of sociology itself in well-being society (in welfare state), I suggest that Bourdieu's sociological theory and his sociological-social practice, the practice of reflexivity based on his sociological theory of knowledge, should be much useful.

Key Words: Clinical Sociology, Pierre Bourdieu, Reflexivity, Well-being Society

1. 問題の設定

現代日本はいま、類稀な歴史的転換期にある。医療やインターネットにおける新しい技術が開発され、様々な情報が交叉し、価値の多様化やライフスタイルの個人化が進展していく一方で、少子化・高齢化の進む人口動態の変容を受けて、新たな社会問題も生じてきている。とくにそれは、家庭・学校・労働市場や医療の現場において、顕著である。テレビや新聞では、虐待やドメスティック・バイオレンス、いじめや学級崩壊、若年層の凶悪犯罪や性規範の変化、不況によるリストラ（失業者）やフリーターの増加、介護・看護疲れによる心中などが、連日のように報道され世間の注目を集めて久しい。人口問題研究所の発表では、2016年には、65歳以上の高齢者が占める割合は、全人口の4分の1にまで上昇すると予測しており¹、介護・看護体制の早急な整備と現場での適切な対応が求められている。今日、こうした新たな社会問題への対処が焦眉の課題とされているのは、来るべき福祉社会への展望を見据えて、育児・教育・労働環境・介護・看護などの多岐にわたる福祉領域に対して、制度と政策を迅速に充実させることが社会的に要請されているためであるといえよう。

このような社会状況を背景として、日本の社会学界はどのような変化を見せているのであろうか。まず研究内容の変遷に注目してみると、社会を研究対象とする社会学においても、現実の社会変動を反映して、福祉領域への関心が高まっていることが分かる。実際の福祉の現場や社会集団の福祉的機能などを対象とした調査や研究が近年数多くなされ、学会や研究会の活動も盛んである。いわば、社会学という学問における「研究対象としての福祉」が注目を集めているのである。他方でまた、研究者を取り巻く教育制度の変化をも考慮すべきである。諸大学の組織編成の動向を概観すると、新たな社会問題・福祉領域に対する早急なる対処という社会的要請に応じるように、福祉関連の諸分野が学部・学科として新設されてきていることが分かる²。福祉関連の新設学部・学科では、福祉についての専門知識を習得した人材の育成を目指して、福祉社会の問題と可能性について、社会学の既存の研究成果をもとに講義・研究に努める教員（社会学研究者）や学生たちの姿が見られる。かつては、社会学を学ぶ学生にとって社会調査論・方法論の習得が重視されていたが、現在では、福祉社会への学問的理解と実践性を備えた学生が求められるようになってきている。また新たな職業集団として形成されつつある社会福祉士との

関係、たとえば社会福祉士の国家試験の受験科目との関係なども考慮に入れるべきであろう。このように、社会学に対する外発的要請として、「教育制度における福祉」への要請が高まっているのである。

以上、検討してきたように、変貌する現代日本において、社会学の「研究対象としての福祉」への学問的注目とともに、福祉社会を担う学生育成のための「教育制度における福祉」への社会的関心も高まっている。換言すれば、来るべき福祉社会に向けて、社会学の学問的意義と社会的貢献とを自ら問うことは、日本の社会学界にとって、取り組むべき内発的課題であると同時に、重要な外発的要請でもあるのである。こうして、これら福祉を対象とする研究者・教員の育成と、研究成果・教育内容の充実化という、日本の社会学界に作用する内的・外的な力の効果により、現在、社会学の研究と実践とを統合した「臨床社会学」という新しい学問分野が構想されるようになったと考える。本稿では、現代日本における臨床社会学の問題と可能性について、ブルデュエーの社会学理論および研究活動を手掛かりとして検討し、福祉社会における社会学の意義を考察することを目的とする。

2. 日本における臨床社会学の構想

日本の臨床社会学の構想は、その名称と共に、多くの社会的実績を上げてきたアメリカの「clinical sociology (臨床社会学)」をモデルとして意識しているように見受けられる(医学・医療モデルの継承など)。そこでまず、アメリカにおける臨床社会学の制度化の経緯を簡単に概観しておきたい³。

シカゴ学派の都市の社会問題に対する実証的研究に見られるように、元来「社会改良」という視点を内包して社会学的研究が進められてきたアメリカでは、「臨床社会学」は応用社会学の一分野として既に1920年代から提唱されている。当時、児童相談所や刑務所に所長として勤務しつつ研究に当たっていた、いわば臨床の現場を知っていた社会学者が、シカゴ大学やデュレイン大学で講義を開設したのが最初であった。その後、研究領域の拡大と研究方法の精緻化が進み、1978年に「臨床社会学会」が設立され、学会誌を中心として、社会問題に取り組むソーシャルワーカーたちへの具体的・現実的提言をも射程に入れた多くの研究がなされるようになった。とくに1991年に刊行されたレバツハ&ブルー編による『臨床社会学ハンドブック』は、既存の臨床心理学の研究成果を踏まえて、事前評価(assessment)・介入(intervention)・事後評価(evaluation)という一連の行為を通じて社会問題の改善を思考するという姿勢を明確に打ち出すことで、福祉・臨床の現場に社会学的知识を還元する独立した・専門性を備えた学問分野として社会的に認知される契機となった⁴。畠中は、このような医学・医療モデルに則った、いわば社会病理への治療を目標としたアメリカにおける臨床社会学に対し

て「米国では、臨床社会学は社会学実践へと変遷していったが、一連の『診断』過程とそれに対する処方箋をセットにした臨床社会学が、混迷する現代社会の個々の問題に対して、一定の役割を果たし、社会的発言力を高めていくことも重要な機能と思われる」と論じて高く評価している⁵。

それでは、日本において臨床社会学が構想されるようになったのは、いつ頃からであろうか。既存の応用社会学・社会病理学・逸脱研究・福祉社会学・医療社会学などから独立して、「社会学の臨床化」というテーマが日本で話題となり始めたのは、おそらく1980年代後半と思われる。

その先駆的研究として、1990-91年にわたって著された加茂論文があげられる⁶。これは、臨床心理学における家族療法の議論、すなわち家族をシステムと見なして、問題を当事者個人に帰属するものとしてではなく、むしろ家族システムの歪みとして解決にあたるという臨床の視点を継承し、逸脱研究や家族社会学のための理論的枠組みを考察したものである。このような、臨床心理学における研究成果の導入は、家族システム論からナラティブ・セラピー、そして社会構成主義へと展開されるにつれ、シンボリック相互作用論や現象学的社会学、エスノメソロジーといった既存の社会学的研究との親和性の高さから、日本の社会学界の中でも注目を集めており、新たな潮流を形成しつつある。また、福祉や臨床に対する個別具体的な研究テーマに関しては、既に様々な学会や研究会において研究蓄積がなされてきている。そこでは、犯罪・非行・いじめ・不登校、児童や高齢者や障害者への虐待、アルコール依存や嗜癖、自助グループ、医療現場における医師と患者の関係、介護や看護における諸問題など、多種多様な領域・対象が扱われてきた。しかし、これらの研究では、社会問題に対する「分析モデル」の構築やそれに基づく調査・分析は進められているものの、具体的な「問題解決」に向けた視点が軽視されるという傾向が指摘されて久しく、今後、臨床社会学との交流の中で相互にどのように影響を与え合えるのかが大いに期待される。

独立した・固有の学問分野としての臨床社会学の制度化が進行しているのは、ここ数年の学界動向である。日本社会学会では、1998年の第71回大会のテーマ部会において、「時期尚早であるかもしれないが…」と司会者によって挨拶されながらも「臨床社会学の構想」が初めて立ち上げられ、翌1999年の第72回大会のテーマ部会「臨床社会学の実践」へと引き継がれ、ようやく二年目を迎えたばかりである。しかし、どちらの部会でも多くの社会学者の関心を集めており、臨床社会学への期待の高さがうかがわれる。また、2000年4月には雑誌『現代のエスプリ』にて「臨床社会学の展開」という特集が生まれ、さらに同年9月には専門科目を学ぶ学生向けテキストとして『臨床社会学のすすめ』が出版された。この、ある意味あまりに早急すぎるテキストの刊行には、純粋に学問的関心から出版されただけ

ではなく、上記「問題設定」において指摘した、教育制度上の要請に深く関連する動きとして捉えることができる。そのため、現在まさに制度化されつつある、日本における臨床社会学の傾向と特徴が、すなわち内発的課題であると同時に外発的要請でもある、社会学の研究と実践とを統合した「臨床社会学」という新しい学問分野の特徴が、端的に示されていると考える。そこで、テキスト『臨床社会学のすすめ』⁷を検討したい。

『臨床社会学のすすめ』の冒頭「はしがき」において、「臨床」という言葉には2つの意味・問題意識を内包していることが強調されている。ひとつは、「臨床医学や臨床心理学と同様に、社会学の理論や知見を現場に応用する」という、いわば応用社会学としての実践的側面である。これは、現在の社会問題や来るべき福祉社会に対する具体的・現実的提言と社会的介入を目指すことであり、そのための制度的確立と社会的承認を前提とする。まさに、日本の社会学界で「教育制度における福祉」が注目されている所以と考えられる。もうひとつは、『臨床』という(医療・福祉・教育などの：著者挿入)現場やそこで行われる実践を研究対象とする⁸ことであり、現場における「臨床の知」や実践を社会学的に検討するという、学問的側面である。これは「研究対象としての福祉」を設定することにより、臨床社会学の境界線すなわち学問的確立を明確化する試みである。ここから、「臨床社会学」という新興分野の設立に向けて、社会学界に対する外発的要請(実践的側面)と内発的課題(学問的位置づけ)とに答えようとする姿勢を読み解くことができる。とはいうものの、本書では両者の関連づけが明確になされておらず、また医学・医療モデルにしたがった「臨床」理解など、社会学独自の分野として、また社会学という学問分野自体に対する問題提起として、十分に理論的考察・反省が加味されているとは言い難い。もちろんそれは、専門科目として学ぶ人に向けた「入門書(テキスト)」としての性格ゆえの制約であるかもしれない。このことは、全体の構成を見ると、臨床社会学を体系的であるよりもトピック網羅的に紹介していることからもうかがえる。また同様に、本書で扱われている内容を検討すると、いわゆる「社会問題」として世間に流布し話題となっている事柄への「適応」と「距離」という、相対する二重性が見出される。それは、「臨床社会学」の構想が、外発的要請に応える(適応する)という形でなされた一方で、内発的課題への接近においては、すなわち具体的研究内容に関しては、社会学研究者各自の専門領域・研究方法に依存しているために、いわゆる「社会問題」から距離が生じるためであり、日本の臨床社会学の構想自体に介在する二重性由来すると想定される。ただし、内容の多様性は臨床社会学の多岐にわたる可能性を示唆するものでもあり、「科学的知」に対峙する「臨床の知」の再評価や、サイコセラピー言説の普及がもたらす社会的効果の分析(アイデンティティの構築主義的分析)、家族をとらえる社会学者の背後仮説の検討、

臨床社会学の政策提言(心理学的・政治学的介入)への可能性、「煽りの文化」に対する「静めの文化」の対比など、新たな社会学の研究対象として注目すべきテーマを展開している。

このように概観してみると、現在の日本における臨床社会学の構想は、内発的課題・外発的要請に回答すべく、新興分野設立に向けての問題提起の意義を十分に持ちつつも、他方で、日本社会学界に影響する内的・外的な影響に応えようとするあまりに、社会学という学問自体の在り方に対する理論的考察・反省が不十分であるように思われる。制度的・学問的確立を急ぐあまり、社会学の研究と実践とを統合した「臨床社会学」の構想が、既存の社会学に対して突き付けた問題提起の意味を改めて検討し、その可能性を考察することを疎かにしてはならない。さもなければ、本来の目的とは裏腹に、高度に専門分化され細分化された連字符社会学の項目を増やしてしまうだけになろう。そこで、以下の節では、ブルデュー社会学を手掛かりに、彼の著した『世界の悲惨』を検討することで、臨床社会学の新たな地平について考察してみたい。

3. ブルデュー社会学理論からの展開： 『世界の悲惨』における反省的 sociology の手法

ブルデューの研究軌跡をたどると、初期のアルジェリアの民族学的研究において既に、当時フランスの支配下にあったアルジェリアの社会変動、すなわち政治的・経済的混乱の中で、人々がどのような困難に直面してきたのか・どのような実践(プラティック)を行ってきたのかを調査・分析している。こうした研究を通じて、調査者と被調査者との距離についての学問的反省、行為者の置かれている客観的状况と主観的期待の構造的相同性の分析、その相同性を媒介する身体=無反省な認識の働きに注目したハビトゥス概念の構築など、その後のブルデュー社会学の基礎となる研究姿勢や概念を確立してきたのである。そこから、ひるがえって自らの位置する現代フランス社会の教育・文化についての調査に乗り出し、教育と文化を通じた社会階級の分析、支配関係の再生産メカニズムの解明と場の理論の構築、および学問的・実践的認識の作用とその歴史的形成の検討へと展開し、それら社会学的研究成果に基づいて、教育(相続できる資本の格差)や労働市場(新自由主義の経済政策による既存の社会集団やその既得権益の解体)における「社会福祉」の問題へと関心を拡大してきたといえる。換言すれば、ブルデューにとっての最大の社会学的研究課題とは、支配関係の社会的メカニズムを明らかにするとともに、無自覚的にその被害者となっている人々に対して社会学的な知識を伝えることで、社会的位置(被支配的な位置)の生み出す苦しみから解放される可能性を学問的に探究しようという試みであると想定される。ブルデュー自身、絶えず自らの社会的・学問的立脚点を反省・再検討することにより、

研究を進めてきたのである⁸。こうした彼の研究課題・研究姿勢は、まさに臨床社会学の目指す既存の社会学への問題提起と共通する部分が大いのではないのだろうか。

以下、このような関心からまとめられ、学術書でありながらフランスでベストセラーとして人々に受け入れられた『世界の悲惨』を中心に⁹、ブルデュー社会学理論の臨床社会学への展開可能性について、考察していきたい。

1) 「研究対象」としての福祉領域： 国家と福祉領域の「場の理論」の構築

ブルデューが1993年に著した『世界の悲惨』においては、貧困層・移民など「福祉の対象とされる人々」、および国家の左手¹⁰といわれる「福祉を担う人々」(社会福祉士・指導員・下級司法官・小中学校の教員・公立のメディアや病院の従業員などを含む、下級公務員としての広義のソーシャルワーカー)といった二者を扱っている。すなわち、「小さな国家」を目指して社会福祉を切り捨てた国家政策の犠牲となった人々(現代社会の中から「排除された人々」)や、これら国家の責任放棄の結果、その埋め合わせを負担させられた人々(国家の左手)が、主な研究対象として設定されている。前述のブルデューの研究軌跡・研究課題を回顧すれば、(教育界・経済界・政治界などからの影響を受けた)国家と福祉領域の場の変遷の分析、現代フランス社会の「場の理論」の構築へと向かったのも、当然の帰結であろう。

このような意図を持った『世界の悲惨』の内容・構成を検討してみると、まず「視点の空間」および「位置の効果」の章においては、1970年ジスカル＝デスタン蔵相により実行された住宅政策(「個人」持ち家政策)に発端をなす、大都市周辺の公営の集団住宅に関わる(福祉を受ける)人々の苦しさ・一連の悲劇について分析されている。この政策により、集団住宅に残された移民・外国人労働者などからなる下層の労働者(貧困層)と、一戸建てやマンションなど個人所有の住宅を購入して去っていった(代わりに多額のローンが残された)中流層の常勤労働者やブチブル層との間の、社会的かつ空間的隔離が生じたのである。とくに、その後の経済不況の煽りを受けて、公的な集団住宅に取り残され・社会的周辺へと追放された住民(HLM借家人)たちの間では、近年、多くの対立・紛争が生じ、社会問題となっている。すなわち、1970年代における視野の狭い近視眼的な社会的・経済的な政策が、むしろ今日の社会問題を生じさせた温床となっていることを、ブルデューは社会学的視点から明確に指摘しているのである¹¹。これらの社会問題は、貧困と劣悪な住宅環境(異なる社会集団・民族の集団移動と混住)など、物理的空間における辺境への隔離と排除にその原因を負っている。公的な集合住宅に残された人々の日常生活における苦しみや不安の源泉には、こうして目に見える形で(特定の地

域・物理的空間として)線引きされ可視化された社会的断絶がある。換言すれば、公的な集合住宅を見捨てた住宅政策と、失業者の増大を生じさせた経済政策といった、政治的決定に起因することを、社会学的分析を通じて明らかとしたのである。一方で、これまで多くのメディアは、このようにして生じる暴動などの社会問題の根底に、社会的排除と空間的混住という経済的・政治的原因を見逃してきた。問題の原因を誤認・隠蔽することで、むしろ異なる文化・人種間の対立という偽りの対象・全く次元の異なる問題として報道してきた。それゆえメディアには、社会問題の意味をすり替えて不快なニュースとして個人的に烙印づけることで、いっそう社会的断絶を承認・推進する働きをもつという点をもブルデューは指摘している¹²。他方で、空間的隔離の最も顕著な例として、スラム化した「区域(Zone)」に住むことを余儀なくされた貧困層へインタビュー調査を行い、路上生活で「その日暮らし」を続ける人々(失業者や街娼)の抱く不安や絶望感の根源に、地理的・社会的空間から排斥されて、どこにも属することのできない「位置」に由来する効果についても丹念なインタビューを通じて検討を加えている。

続く「国家の責任放棄」の章では、前出の複雑な対立的状況を管理する(福祉を担う)ことを任務としている教師・職安の担当者・指導員などの国家の下級官僚、いわゆる国家の左手と呼ばれる人々を対象としている。彼らは、福祉予算の削減や、偽りの民主化(民営化や自由主義化)などによる、国家の果たすべき福祉的責任の放棄から生じた問題を背負わされることとなった。彼らはまさに、社会の諸矛盾を内包した不安定な社会的位置から生じる二重の束縛(ダブル・バインド)を、自らの悲劇として生きざるをえない人々である。すなわち、福祉を担う彼らの社会的地位は、重要だが蔑視されるものとして(賃金の低さによっても推測される)、また彼らの任務は多忙で骨折りが内実は些細なことであるとして、彼らの仕事は要求されることは多いが報われることは少ないものとして、社会的に性格づけられているのである。国家が彼らの任務を成功させる手段を与えないがために、彼らの任務は「不可能な使命」として、常に失敗に終わらざるをえない。ブルデューは、近年これら国家の下級官僚の間で蔓延する無気力感と反抗が、仕事に対する忠誠心や道徳心の退廃にあるのではなく、むしろ国家の福祉政策の矛盾に派生していることを構造的に明らかにするのである。

「衰退」の章では、特定の人々の所属する社会集団自体が、1970年代以降急速に再編される産業構造の中であって、下降していることから生じる苦しみを対象としている。つまり、経済政策および国際競争の影響下であって、活動が衰退する部門・早急な構造調整を必要とする部門に属し、それゆえ産業部門と同様に下降の社会的軌跡を辿らざるを得ない人々の苦悩である。伝統的な産業、例えば、古くから行われてきた農業経営やテイラー主義方式の工場、地方の零細な商店主、鉄鋼産業で働く人々、

そして、混乱した新たな社会状況の中で社会闘争をめぐり組織された政治的・社会的活動グループの活動家たち。これらの人々に実感される「世界の終焉」とは、世界に結びつけられ・そこでの活動により生計を立ててきた自らの存在の構造的衰退と終焉とを意味する。市場経済の原理により原子化され解体された彼らは、我先にと目先の利益を追い求め、共に連帯することもなく、衰退の道を辿るのである。たとえ共通の目標を掲げて集まった活動家たちでさえ、外部（社会）に位置を見出すことなく、集団内部で互いの足を引っ張り合い、自滅していく。こうしてブルデューは、労働者層の原子化・解体を推し進める過度な自由主義経済（ネオ・リベラリズム）の犠牲となった末に、臨時雇用者や夜間労働者、失業者やホームレスに辿りついた人々の苦悩が、現代フランス社会が向かおうとしている歴史的・文化的状況に由来することに眼差しを向けるのである。

最後に「内部で除名された人々」「遺産相続の矛盾」の章では、教育制度に関する人々の苦しみ、また教育制度を介した家族の世代間の苦悩を対象としている。学校は、本来の目的に反して、個人の社会的選別と排除の審級として機能する、苦悩する社会制度となってしまった。貧困層の社会的上昇の希望の担い手であったはずの学校教育は、なんら満足する手段を与えないものとして幻滅された。学歴をめぐる競争は熾烈化するにも関わらず、学歴インフレが進むことで、学歴が保証する将来への信頼はいっそう失墜している。進学と就職をめぐる、家族は世代によってそれぞれ異なる再生産戦略へと巻き込まれている。親が子どもに投影する達成不能な望みは、生涯消えることのない烙印・親の期待に応えられなかったというトラウマを子どもに刻みつける。他方で、子どもがあまりに成功し社会的な上昇を果たせば、家族の社会的出自から社会的・空間的にかげ離れてしまい、親の精神的・地理的孤立の要因となる。こうした家族戦略の矛盾は、とくに移民の家族において顕著であり、出身集団の価値とは異なる・対立する価値を推奨する社会のなかで、絶望的な仕方で再生産しようとする外国人労働者家族の文化的葛藤をも分析の視野に入れている。このようにしてブルデューは、現代フランス社会に生きる人たちが抱えた様々な不安と苦悩を社会的に描写し説明しているのである。

2) 「研究方法」としての対話的技法： 「社会分析」の生成過程と特徴

『社会の悲慘』においてブルデューは、これまで間接的・暗示的に言及してきた自らの研究方法である「社会分析 (Socio-analyse)」について、「理解すること」という最終章を設け明らかにしている。それは、「場の理論」の分析・調査のために、自らが得たこれまでの社会的知見を、ひるがえって自らの研究実践において、具体的なインタビュー調査の現場において、不断に反映＝再帰させるという反省的 sociology の徹底を通じて導出された手法である。

「社会分析」は、社会学に関わる様々な次元での「反省性 (reflexivity)」を用いること、いわば自己反省的視点を持つことであり、それに付随して、社会学の研究実践そのものが、福祉的・臨床的効果を発揮する可能性について示唆するものでもある。以下に、その生成過程と特徴について検討してみたい。

『世界の悲慘』は、その題名にあるように、現代フランス社会に生きる人々が自らの属する社会集団において強く抱えている苦しさや不安の根底にある社会の様相をとらえることを課題としている。そのためにブルデューは、インタビュー調査における対話の技法についての考察から始めなければならなかった。彼が対象とする人々は、現在進行している政治的・経済的変化の中で「排除された人々」であり、常に社会的な沈黙を強いられてきた人々である。無反省に、また認識論的に無自覚に、インタビュー調査を行うことは、彼らがこれまで社会の中で曝されてきた圧力と象徴的暴力とを調査の現場で再生産することに他ならない。それゆえ、彼らに沈黙を強いてきた、対話の過程に作用する象徴的暴力・検閲の効果を極力排し、彼らに自ずと本音を語るようにしてもらうのに適切な調査の手法を検討する必要が生じたのである。このために、研究者・調査者自身が、「排除された人々」が社会的に作り出された過程を、すなわち個人の合理化のメカニズムや社会の様々なステレオタイプによって維持され・耐えられている日常生活における実践 (pratique) と、身体化された認識＝分割様式とを、支配のメカニズムの分析を通じて社会的に理解することが不可欠となる。

『世界の悲慘』が目指したのは、貧困や移民といった社会的に困難な状況におかれた諸個人の「証言集」ではないし、ましてや対話記録として公開された「自伝」や「回顧録」でもない。単に主観的な個人史を集めたのではなく、むしろ諸個人の深層に働く社会を解明するための研究であり、あくまでも客観的・社会的次元を内包する社会的な研究成果の一環なのである。それは、ブルデューが 1970 年代初頭に着手して以来の、教育・文化・階級をめぐる社会学的研究や、学問的・実践的思考様式の検討、そして教育システム・支配的な経済や政治のイデオロギー・高級官僚の地位などの歴史的変遷の分析といった、彼の研究軌跡の延長線上に位置づけられる「場の理論」の社会的分析として見なすべきである。彼の社会的分析の成果を反映＝再帰したインタビュー調査において聞き取られる人々の私的かつ個別具体的な対話は、それゆえ、きわめて一般的な社会的メカニズムを把握させてくれるものであり、社会構造もたらす重圧¹³や社会構造に作用する支配のメカニズムを理解させてくれることを示している。すなわち「社会分析」を用いることで、単に事象にそってインタビューを網羅的に並置するのではなく、社会的な苦しみを産出する社会的＝象徴的暴力を体系的に分析する試みを行ったのである。換言すれば『世界の悲慘』が目指したのは、日常生活における屈辱感・不正・拒絶・暮らしにく

さ・碎かれた夢、多様な階級や文化に属する諸個人間に強制された混住から生じる対立、そして社会的な帰属の喪失（特に「失業への恐怖」と結びつく動揺や不安、手段の欠如による無気力感などの論理を理解することである。ブルデューは、それぞれを、公的な社会福祉の後退と国家の役割の再定義とに結びつけることを通じて、諸個人の次元に重要な構造解体の影響が作用していることを説明することを可能にした。そのため、これらの対話は、社会問題を生じさる地区や地域、学校や大学の危機、産業構造の再調整の社会的帰結、あるいは公的な社会福祉の後退によって生じた問題として、社会学的に描写された「構造的暴力」の一部として分析することができたのである。

さて、この「社会分析」という対話的技法は、ブルデューにとって、まず計量的方法への反省として立ち現れた。主観に収斂されない客観的なものを「社会」として研究対象に据えたブルデューの社会学的研究方法にとって、自らの主観を打破し、自然発生的な認識を社会学的認識論に置き換えるためにも、統計調査に代表される計量的方法への立脚は不可欠のものとして重視されてきた。しかしそこには、統計データのサンプル（母集団）の代表性、調査者の中立性信仰（自らの研究実践に対する認識論的無反省）、そして調査そのものの了解可能性と伝達可能性（社会学的な視点を確立するための認識論的切断が産出する、調査者と被調査者との間の社会的断絶）という3つのドグマが介在する。だからといって計量的方法が無意味というわけではなく、認識の正しさを検証する道具としては十分な有用性を依然として保持しているという点で評価・尊重すべきものである。そこでブルデューは、計量的方法のみに固執するのではなく、複数の手法を駆使して、社会を体系的にとらえるという方法を採用する。それは、単なる妥協ではなく、それぞれの研究対象に適したそれぞれの方法を並立し運用することである。彼は、矛盾のない調査法のための調査・分析のための分析を行うのではなく、調査の実際の機能を検討することを優先して、方法論的多元論を採用したのである。こうした様々な既存の社会学的方法（エスノメソドロジー・客観的計量的調査・臨床的調査など）を内包するのが「社会分析」である。「社会分析」は、各学派・世代間の対立や質的・量的区別をもたず、従来の社会学的な方法から一定の距離・反省をもつ。すなわち、そうした対立・区別を相補的なものと捉え、計量的調査こそが、被調査者の社会的地位についてのデータを提供し、インタビュー調査の理解を助ける。また同様に、インタビュー内容の解釈に基づいて、計量的調査の枠組みも再考されるのである。そのため、研究者・調査者の十分な反省的自覚に基づく対話的技法として設定された「社会分析」は、単なる聞き取りのための技法ではない。調査の現場において、社会構造を把握する客観的技法（統計的調査による量的研究）の成果と、構造の内在化を捉える主観的技法（インタビュー調査による質的研究）の成果との間で不断に行われる

往復運動が不可欠な、トータルな研究手法として理解されねばならない。

ブルデューは、この「社会分析」の具体的な特徴を以下の五点として挙げている¹⁴。ひとつは、「再帰的反省性」である。調査の関係がコミュニケーションの内容に影響する一つの「社会関係」であることを自覚している社会学者は、反省的な警戒という不断の性向を獲得しなければならない。そうすれば、対話がなされる社会構造についての印象を、とりわけ調査の対象として考えられていたものと調査によって知覚されたものとの間のズレの印象を、社会学者は、その対話的技法によって導かれるものの中に感じ取って、検討・理論化することができるのである。二つ目には、非暴力的なコミュニケーションへの志向が挙げられる。インタビュー調査の現場には、本質的に非対称的な関係が生じる。なぜなら、「社会関係」としての実際の調査は、コミュニケーションの内容と形式を圧迫する、言語的財と象徴的財の不均衡な市場を形成するからである。そこで、相互作用とくに「フィード・バック」の特性を理解し、また適切な調査者（知人や現地の調査者）を選択し関係の構造を調べることで、調査の機会に行使され得る象徴的暴力をできる限り減らす手段を検討・考案することが重要なのである。三つ目は、それにより、構造的に確立された臨床的知識の必要性である。調査者は、被調査者から調査者を隔てている社会的距離を放棄することなしに「問題性の義務づけの印象」を中立化し得ない。調査者は「思考にふさわしい場所」に身を置き、口調によって、そして特にその質問の内容によって調査を納得させるようにする。そのためには、調査者は、被調査者に関する属性的・生得的知識に、つまりその存在を「社会学的に必要なもの」としている全ての知識に精通していなければならない。そのような手法を用いることで、引き起こされる付随的な自己分析が四つ目の特徴である。被調査者が「知っているが表現できないこと」「感じているが否認・抑圧していること」を対話的技法を通じて引き出すという点では、ソクラテスの産婆術にも例えられる。長期にわたる反復的な対話を通じて、被調査者と社会学的知見を共有し、それにより被調査者が自分自身を、そして自らの社会的地位を問いただす機会を提供し、またこの作業に関して彼を手伝うことを目指すものである。最後に、このようにして説明される諸個人にとっての「リアリティ」の構成は、研究者視点の押しつけではなく、問いかけの流れに沿って輪郭を取りはじめ、社会的世界についてのデータを構成していく。すなわち、データ自身に内在する構造（対話的状況を通じて引き出される社会構造を反映した内容）に応じて、社会的世界に関するリアリティ構成の働きが明らかにされるのである。

このように「社会分析」においては、統計的資料（社会学の客観的知見）に裏打ちされた、非暴力的な理解、すなわち被調査者の立場の受容を伴う問いかけが重要となる。社会科学においては主観主義と客観主義、また個人の自由な創造性と社会的拘束性

への注目といった、伝統的学説の対立があるが、「社会分析」はこれらの対立を社会的世界を理解するための相補的な手段としてとらえる。対立する視点の相補性に注目することは、個人の中に社会が存在しており、社会的な拘束は各人の最深部に含まれた状態でしか存在しないことを想起することである。他方で、個人も既存の社会の中にしか存在せず、社会は社会化の過程を通じて社会構造を構成員である諸個人の身体と精神に組み入れる。それは、方法論における「個人/社会」「主観/客観」という対立を超克する視点でもある。同様に、統計データで主観的世界を含む社会的世界すべてを説明することはできず、また対話により集められた素材を客観的世界との関連づけなしに勝手自由に解釈できるわけでもない。ただ、社会学の知見を熟知する調査者と、日常生活における「リアリティ」を感得する被調査者との協力によって、社会的世界に関する真の「リアリティ」の構成が、現実の言説が、可能となるのである。

また「社会分析」という対話的技法は、あたかも思慮分別のある哲学が奨励するのに似た、視線の転換を提供する。そしてその対話的技法は、他者の置かれた社会的位置の効果に注意することによって、また自らを生み出した社会的条件に注意することによって、その存在とその存在の有り様についての幻想や自己満足なしの受容に至るのである。社会学者の職務とは、人々が世界に関するひとつの視点（世界観）によって定義される生き方（the way of life）に拘束されていることを教えることであるとブルデューは示唆する。いわば、社会学を教えるということは、常に一種の転換を引き起こすことを目指すものである。「社会分析」は概して、ひとつの「社会学研究法」のように受け取られがちであるが、それはまた、世界観の変換を前提とする「精神的訓練」としての広がり内包しているのである。

3) アンガージュマンとしての「社会参加」： ブルデューにとっての(臨床)社会学の実践

ブルデューが『世界の悲惨』で扱ったのは、国家と福祉領域をめぐる、福祉社会をめぐる「場」の理論の構築であり、それは研究対象として「福祉」を指向しているだけでなく、研究実践（理論化と調査の過程）においても、自己分析としての「社会分析」の効果、すなわち認識論的な反省を伴った「福祉的・臨床的」効果を備えていることが明らかとなった。この研究を通じてブルデューは、学問としての専門性・厳密さを放棄することなく、現実の社会に向けて関与しうる・関与すべき社会学の在り方について考察を深めることとなる¹⁵。ひとつは、研究者が社会学の研究実践（理論化・調査の過程）において考慮すべき、福祉的・臨床的作用である。『世界の悲惨』を刊行することで、ブルデューは社会学的眼差しを持つことの意義と可能性を再確認している。社会学者が社会を解明する研究を続けながらも、ニヒリズムに陥ることなく、どういった社会的貢献

ができるか？ その解答のひとつは、沈黙を強いられている人々の声を拾い上げることであった。本書を著すにあたって、ブルデューとその共同研究者たちは、200名を越す人々にインタビュー調査を行っているが、これは現代に生きる人々の社会的な代弁を行うことであり、一般の読者がこの本を通じて同時代の異なる世界の人々に社会学的眼差しを注いでもらうことを目標としている。これは、発言する機会が奪われた人々の意見に耳を傾け、より寛容な社会にする、つまり既存の価値観から人々を「解放」するきっかけを与えるという社会学者の役割でもある。もちろん、このようなインタビュー調査を行うためには、「本当の言葉」の出現しうる社会的条件の存在について知る必要がある。それは、とくに社会的に沈黙を強いられ、借り物の言葉しか使えない被支配者層の人々の言説を出現させるために不可欠な前提とされる特殊な知識である。したがって社会学は、「声なき者たち」の代弁者として、一種の福祉的な現代の「公的作家」となる可能性を包含している。

また、第二には、社会学は社会的苦悩に対する処方箋であり、社会的な仕方で進められる対話関係が個人のレベルである程度の精神分析的な効果をもつことができる。「社会分析」としての対話的手法の命名は、精神分析にならっており、個人を長期にわたりインタビューし、その人の背景・社会的メカニズムを聞くこと、つまり被調査者に対して、調査者および被調査者自身が社会学的眼差しを向けることである。これは、前述したように、既存の調査に対する反省から生まれた臨床的效果である。「社会分析」を通じて、彼らの苦しみの源泉にある内的葛藤の原理を対話による自己反省の促進によって自覚し、彼らが再び自分で引き受けることで、社会学は精神分析と同様の作用を、社会的次元の自己理解・社会的アイデンティティの受容として果たすことができるのである。ブルデューは、インタビューに答えて、これを自ら『『世界の悲惨』を社会分析の診療報告書の集成として考えることができるのは事実です。…中略… 社会的なものに起因する苦しみを抱いた人に、その苦しみを消し去るとは言わないまでも、少なくともそれを象徴的に制御する手段を、社会学者は与えるのです』¹⁶と云って、社会学の臨床的用途について言及している。

さらに、第三として、社会学が収集した私的な警告を公表し広範な人々に読めるようにすることで、「社会分析」は、社会学の研究実践に直接関与しなかった（研究者でも被調査者でもない）読者に対して、新たに開かれるようになる。すなわち、読書を通じて社会学的知識を獲得することにより、自らの位置に由来する社会的制約を自覚することで、そこから自由になる可能性を示唆させるものである。社会学が解明する社会的位置空間に由来する支配のメカニズムを理解し、読者各自が自己分析を行うことで、「社会分析」のもつ臨床的效果が発揮される。また、広く社会全体へと視点を移していけば、支配のメカニズムを理解し、科学的分析が可能となるこ

とで、個人的に体験された不正な苦しみや不安の源泉に、支配のメカニズムの解明という科学的手段が与えられることで、同様な社会的位置に属する人々と理解し合い、連帯を可能にする。すなわち、個人的な苦悩を、社会的な運動へと昇華する手段を提供するという、きわめて具体的・政治的な役割をも担うことができるのである。

このように『世界の悲慘』を通じて行われたブルデューの社会学理論の研究対象としての「福祉」領域への指向と、反省的な研究実践（理論化・調査の過程）における「福祉」的効果の自覚は、彼自身の認識論的な相互作用の過程において密接に関連している。そこで次に、この研究過程と同時平行的に展開された、ブルデューの社会参加（アンガージュマン）について考察したい。

前述した通りブルデューは、その研究の端緒となるアルジェリアの民族学的研究を開始するにあたって、アルジェリアの独立戦争支持の立場から現地へ赴き研究を進め、クセジュ文庫から一般読者を対象とした『アルジェリアの社会学』を著している。アルジェリアを社会学的分析に分析し、その社会状況を理解する手段を公開することを通じて、フランスの人々の支持を募ったのである。同様に、1993年に『世界の悲慘』を著すことと前後するように、ブルデューは様々な社会運動に関与してきた¹⁷。ブルデューのアンガージュマンにおいて際立つ特徴は、認識論的次元における反省性の重視、すなわち、素朴な知識人として社会的発言を行っているのではなく、彼が自らの研究実践において用いてきた反省的認識論の手法を、たとえば関係的思考様式、二項対立の止揚、主客の統合、対立する相補的立場を「条件」かつ「所産」として分析する手法などを、人々の持つ社会的世界の認識の変容のために適用している点に挙げられる。社会の公的サービスの衰退により、被害者を不幸の責任はその当事者であるとして非難すること、また被害者に自助努力を強いることは、社会的次元の問題を、個人の次元にすり替えて解消しようとしていることに他ならない。こう指摘するブルデューは、誰にも平等に開かれているはずの教育制度において、文化的再生産のメカニズムが作用していると分析した社会学視点を運用したものである。また、欲望に目がくらんだ国民の真の幸福を理解しそれを実現できると自ら豪語する政治家を批判する視点は、社会学的研究において客観化の限界を自覚せず行為者の無意識の原理を解明できると主張した構造主義の陥った認識論的無反省に対する批判と相同的である。市場経済原理の徹底により、労働者層の原子化・孤立化を促進する新自由主義経済（ネオ・リベラリズム）に対してブルデューが行った痛烈な非難は、シニカルな社会決定論を吹聴する研究者が用いる象徴作用（一時の歴史的・社会的状況を宿命論的に語る象徴的暴力）の社会学的分析に裏付けられた説得力をもつものとなっている。ネオ・リベラリズムの信奉者の用いる経済原理の裏に、理論の物象化・実体化という認識論的無意識が隠蔽されていることを鋭く言及

する。そして、真の経済学は、経済原理（理論）と労働者の実態（実践）との間のズレを考慮に入れることで初めて成立することを示唆する。これは、ブルデューが客観的・主観的に把握される社会的世界のズレを、時間と空間の意味づけと身体化された「ハビトゥス」概念とを媒介にして包括的に理論化した、その学問的認識様式の適用でもある。また、現状を無視したプロパガンダを警戒し、社会的世界を理解することで初めて、現行の支配のメカニズムを変化させる可能性を示唆する。0か100か、白か黒かという二元論を突き付けるメディアの煽りの戦略に対しても、二項対立を生じさせる社会的諸条件の分析こそが両者を止揚させる契機となることを指摘する。こうして、現状維持を望む保守主義に迎合した御用学者とならずに、自らの学問的成果を社会に還元するための条件として、文化的生産の場の自律性（メディアや経済原理からの自律性）を守ることが主張するのである。

ブルデューは、1996年パリの社会運動総結集シンポジウムの開会集会で次のような発言をしている。「大切なことは反省的（reflexive）であることです。大げさな言葉ですが、出まかせで使っているではありません。私たちが目標としているのは、答えを創ることだけではなく、答えを創る仕方を作ることでもあります。つまり、異議申立てを組織する新しい仕方、行動を組織する新しい仕方を作ることです。私たち社会学者の夢は、私たちの研究が社会運動に役立つことです。」¹⁸ これまでのブルデューは、社会に現存する再生産や支配のメカニズムを分析しつつも、厳しい自己検閲によって社会学者であろうとし、知識人として行動を起こすことを頑なに自戒していたようにも思われる。しかし「慎重すぎる・保守的すぎる」とさえ批判されてきたブルデューだが、今日では、社会運動を扇動するのではなく、むしろ「排除された人々」「声なき者たち」の社会的対話のための条件設定を整えるための手段として、これまでの社会学的研究の成果を用いるようになってきている。それは、来るべき福祉社会における新たな知識人の役割と可能性を示唆するものであり、私たちにとっても十分検討に値すると考える。

4. 結語：

福祉社会における社会学の可能性と必要性

以上、臨床社会学が既存の社会学に対して突き付けた問題提起を再構築・検討するために、ブルデュー社会学を手掛かりとして検討した。来るべき福祉社会における社会学の可能性と必要性について、また日本の臨床社会学への新たな地平に向けて、今一度、彼の社会学理論および研究活動を整理しよう。

ブルデュー社会学を特徴づけるのは、彼の徹底した「反省性」、自己反省的な視点である。そこから（臨床）社会学の3つの様相・3つの次元が導出される。ひとつは、研究成果（生産物）としての理論の次元である。それは、国家と福祉領域の、すなわ

ち福祉社会の「場」の理論の構築を目指した、広義の「福祉」を対象とした社会学理論(象徴的支配の社会学)として結実している。次に挙げられるのは、研究実践(生産過程)、すなわち理論化・調査過程への認識論的反省の次元である。自己分析を基とする「社会分析」という対話的技法が導出され、その研究者=調査者、被調査者、そして読者に対しても、研究実践そのものが一定の臨床的効果を持つことが明らかとなった。最後に、社会参加(生産物の伝達)の次元であり、知識人としてのアンガージュマンを通じて、社会学理論の知見に基づく、研究実践の手法を現実社会に適用した具体的・政治的「再帰的反省性」の次元を挙げることができる。詳細な社会学的研究の成果に基づき、社会学の研究実践(理論化・調査過程)における認識論の重要性を提唱し、その研究実践の過程において臨床的効果をもった「社会分析」を考案したブルデューは、『世界の悲惨』が学術書でありながら広く一般の人々に支持されたことに力を得て、自ら積極的に学問成果(社会学の知見の紹介と認識論的転換)を社会的還元へと進めて行った。彼の研究軌跡をたどると、本来、社会学はきわめて「臨床的」「福祉的」志向をもった学問であるといえよう。

とくに注目すべきは、ブルデュー社会学の確立が、社会的世界の通常の認識=分割様式を社会学的に再編する作業を核にして構想されており、それゆえ、他領域の学問の認識=分割様式と、すなわち個人の主観に焦点を当てる心理学的断章、および合理的・抽象的原理で社会を推し進める経済学的宿命論からの、制度的区分を試みる際に生じる科学的困難を常に伴っている・意識している点である。ブルデュー社会学は、そのどちらにも傾倒することなく、社会的世界における関係性の中で生じる位置の効果が、人々の認識=分割様式にどのように作用するかを新たに問題として設定する。そこには、学問としての境界線を明確にするという、まさに認識=分割様式をめぐる象徴的闘争が働いているのかもしれない。ブルデューは、それさえも己の社会学理論に包摂し、学問的認識様式と実践的認識様式の相同性、理論と実践の相同性として(あたかも『実践感覚』と『ディスタクシオン』の相補性的ように)、止揚しようと試みているのである。

ブルデューの社会学理論および研究活動とその軌跡から、日本の社会学が学ぶことは多い。前出の「問題提起」において、来るべき福祉社会に向けて、社会学の学問的意義と社会的貢献とを自ら問うことは、日本の社会学界にとって、取り組むべき内発的課題であると同時に、重要な外発的要請でもあると指摘した。しかし、臨床社会学の構想という新たな学問分野の設立を急ぎ、日本の社会学界に作用する内的・外的な力の効果に曝されているばかりでは、社会学の研究と実践とを統合した「臨床社会学」という問題提起を十分に理解していることにはならない。それでは単に、少子化の影響を受けて、受験生の確保と大学組織運営の見直しにより、社会学の学生・院生の社会福祉方面への就職市場進出を目指

した、「臨床社会学」の設立に関わる一部の既得権益をめぐる人々にとっただけの問題となってしまう。「臨床社会学」の構想というインパクトが私たちに突き付けるのは、むしろ福祉社会における社会学自体の意義を、その可能性と必要性を、今こそ社会学研究者各自が検討・熟考する時期にある、ということではないだろうか。

(2000年9月脱稿)

【註】

- 1 日本が超高齢社会を迎える時期の予測は、年々早められ更新されている。そのため、実際にはもっと早く超高齢社会が到来するとも考えられる。
- 2 本校も2000年4月から、情報ネットワーク工学科とともに、福祉システム工学科が設立され、高齢者・障害者への適切な福祉用具の提供を実施できる福祉的知識を備えた工学に強い人材の育成に努めている。来るべき福祉社会への先見性と社会的意義とを射程に入れた新設学科の今後の活躍は、日本の教育界においても注目すべきものとなる。
- 3 詳細は、本村[2000]、畠中[2000b]を参照。
- 4 詳細は[Rebech & Bruhn 1991]を参照。
- 5 畠中[2000a 7頁]より引用。
- 6 加茂[1990]および[1991]を参照。
- 7 本書[大村・野口(編)2000]の目次構成は、以下の通り。序章・臨床社会学とは何か、1章・サイコセラピーの臨床社会学、2章・「存在証明」の臨床社会学、3章・「自己啓発セミナー」の臨床社会学、4章・看護に学ぶ臨床社会学、5章・「問題家族」の臨床社会学、6章・クラスルームの臨床社会学、7章・保育政策の臨床社会学、8章：政策現場の臨床社会学、9章・「死ねない時代」の臨床社会学。
- 8 ブルデュー自身の社会的出自およびその後の経緯と学問形成との関連については、拙稿[三浦1997]および[三浦1999]を参照されたい。
- 9 現代フランス社会に生きる人々の不安と苦悩を社会学的に描写し解明したこの『世界の悲惨』は、学術書でありながら初版だけで10万部以上も売れ、現在ではより手軽なペーパーバック版が普及している。また、この本を劇化とした上演も各地で15件以上行われており、フランス国内のみならず、ヨーロッパ諸国にも広く翻訳され親しまれている。[Bourdieu 1999b]を参照のこと。
- 10 社会福祉を担い「国家の金食い虫」と揶揄される「国家の左手」に対して、多くの政策立案に影響し遂行させる力をもった「国家の右手」とは、大蔵省や銀行、各省庁の大臣官房を占める(福祉の現場を知らない)国家エリートとして定義されている。
- 11 新自由主義経済学(ネオ・リベラリズム)への批判に関しては、Bourdieu[1998 34-50=2000 57-80]を参照。
- 12 こうしたテレビを筆頭とするメディアの果たす機能については、Bourdieu[1996=2000]における分析が詳しい。

¹³ 『世界の悲慘』の英訳タイトルは、Weight of the World、すなわち『世界の重み』である。

¹⁴ 以下、[Bourdieu 1993]に掲載されている伝語レジュメの拙訳を基にまとめている。

¹⁵ [Bourdieu 1999b] および [Champagne 1999] を参照。

¹⁶ Bourdieu [1999b 88頁] より引用。

¹⁷ 小林 [1999 204-5頁] の図表「政治的・社会的問題への直接的・間接的参加運動：P.ブルデューの場合」に詳細がまとめられている。また、労働組合やストライキを行う人々へ向けた公演、彼らを支持する新聞記事や雑誌のインタビューをまとめたものとして Bourdieu [1996] を参照されたい。

¹⁸ Bourdieu [1996 64-65=2000 102] より引用。

【参考文献】

- Bourdieu, P. 1979, *La Distinction: sritique sociale du jugement*, Editions de Minuit (石井洋二郎訳『ディスタクシオン』I・II, 藤原書店, 1990)
- Bourdieu, P. 1980, *Le Sens Pratique*, Editions de Minuit (今村仁司ほか訳『実践感覚』I・II, みすず書房, 1988・1990)
- Bourdieu, P. 1984, *Homo academicus*, Editions de Minuit (石崎晴己・東松秀雄訳『ホモ・アカデミクス』藤原書店, 1997)
- Bourdieu, P. 1993, 「『理解する』あるいは社会分析(socio-analyse)とは何か？」(紀 葉子訳) 『東洋大学社会学部紀要』37-1
- Bourdieu, P. 1996, *Sur la Television, Liber-Raisons d'agir* (櫻本陽一訳『メディア批判』藤原書店, 2000)
- Bourdieu, P. 1998, *Contre-feux, Liber-Raisons d'agir* (加藤晴久訳『市場独裁主義批判』藤原書店, 2000)
- Bourdieu, P. 1999a 「文化・教育・学校の未来と知識人」(櫻本陽一訳) 『世界』4月号
- Bourdieu, P. 1999b 「『世界の悲慘』から国際的社会運動へ」(石崎晴己訳) 『情況』12月号
- Bourdieu, P.(avec J-C.Chamboredon et J-C.Passeron) 1968, *Le Metier de Sociologue*, Mouton-Bordas (田原音和・水島和則訳『社会学者のメチエ』藤原書店, 1994)
- Bourdieu, P.(et al.) 1993, *La Misere du Monde*, Editions de Seuil (Ferguson, P.P(tr.) *The Weight of the World*, Polity Press)
- Bourdieu, P.(& Wacquant, L.J.D.) 1992, *An Invitation to Reflexive Sociology*, The University of Chicago Press
- Bourdieu, P.(& Gunter, G.) 2000, 「『声をあげる』という伝統」(石田英敬訳) 『世界』7月号
- Champagne, P. 1999 「社会学的対話についての考察：P.ブルデュー『世界の悲慘』をめぐる」(杉山光信訳) 『思想』872
- 加茂 陽 1990 「社会学の臨床化の試み」『ソシオロジ』107
- 加茂 陽 1991 「社会学の臨床化の試み・2：現代社会の家族分析の基本的視点」同 111
- 畠中宗一 2000a 「診断としての『事前評価・介入・事後評価』を目指して」『現代のエスプリ』393
- 畠中宗一 2000b 「臨床社会学の対象と方法、そして課題」『現代のエスプリ』393
- 畠中宗一ほか 2000 「座談会：なぜいま臨床社会学なのか」『現代のエスプリ』393
- 北條英勝 1998 「P.ブルデューの象徴的支配の社会学と『社会-分析』の臨床的機能：社会学の現実への再帰性=反省性と認識論的反省」『東洋大学大学院紀要』34
- 北條英勝 2000 「ブルデュー社会学における『社会-分析』と認識論」日仏社会学会 2000 年度大会発表レジュメ
- 小林幸一郎 1999 「ブルデューの社会学的アンガージュマン：デュルケムとの比較において」P.ブルデュー社会学研究会編『象徴的支配の社会学：ブルデューの認識と実践』恒星社厚生閣
- McNamee, S. & Gergen, K.J. 1992, *Therapy as Social Construction*, Sage Publication (野口裕二・野村直樹訳『ナラティブ・セラピー：社会構成主義の実践』金剛出版, 1997)
- Mills, C.W. 1959, *The Sociological Imagination*, Oxford University Press (鈴木広訳『社会学的想像力』紀伊国屋書店, 1965)
- 三浦直子 1997 「P.Bourdieu の研究実践と認識論の基層的形成：1951-64年における問題関心と学問形成の関連をめぐる」『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』44
- 三浦直子 1999 「反省的 sociology の生成：ブルデュー社会学における認識論の位置づけをめぐる」P.ブルデュー社会学研究会編『象徴的支配の社会学：ブルデューの認識と実践』恒星社厚生閣
- 本村 汎 2000 「アメリカにおける臨床社会学史概観」『現代のエスプリ』393
- 大村英昭・野口裕二(編) 2000 『臨床社会学のすすめ』有斐閣
- 小澤浩明 1999 「日本における社会階級・社会問題研究とブルデュー社会学理論」『情況』12月号
- Rebach, H.M. & Bruhn, J.G.(eds.) 1991, *Handbook of Clinical Sociology*, Plenum
- Robbins, D. 2000, *Bourdieu & Culture*, Sage Publications